The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ベルン時代のヘーゲル
Author(s)	淺野, 遼二
Citation	大阪大学, 1996, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/39500
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【6】

氏　　名	浅野遼二（あさの りょうじ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学位記番号	第　12560　号
学位授与年月日	平成8年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	**ベルン時代のヘーゲル**
論文審査委員	（主査） 教　授　里見　軍之 （副査） 教　授　溝口　宏平　　助教授　中岡　成文　　助教授　入江　幸男

論文内容の要旨

本論文は，ヘーゲル研究において従来軽視されがちであったベルン時代（1793年秋～1796年末）のヘーゲルの思索活動を詳細に論じた研究である。本論文は，従来の研究方法を，ローゼンクランツ等の体系的な伝記型，ディルタイ等の総合的な発展史型，ルカーチ等の批判的な弁証法型に分類し，これ等の方法に対し，ヘーゲル自身に主体的に十分に語り尽くさせた上で，それを追構成するという独自な「内面的主体的方法」をもって，初期ヘーゲル哲学の形成過程に見られる創造的独自性を追求していく。

第一部　若いヘーゲル研究の軌跡――ベルンのヘーゲル像――

ベルン期を含む「若いヘーゲル」に関する定評ある研究書が論評される。

最も古いローゼンクランツの『ヘーゲル伝』は，当時の時代精神である啓蒙主義を自らのものとし，精神の自立性と理性の権威とをもってイエスを見ようとするヘーゲルの青年時代の思想遍歴を客観的に記録している。後の多くの「若いヘーゲル」研究が生み出されるきっかけとなったディルタイの『ヘーゲルの青年時代』は，ヘーゲルの神学的傾向を発展史的に捉えている。即ち，ディルタイは，カントの啓蒙主義の影響を受けたヘーゲルが，イエスを道徳的理想の体現者と見て，この道徳的な理性信仰と旧来の実定的な教会信仰との対立を分析し，更に理性宗教に基づいた新しい民族宗教の確立を目指しつつ，最後に汎神論的神秘主義に達すると言う。史的唯物論の立場からディルタイの非合理主義的解釈を真正面から批判するのがルカーチの『若きヘーゲル』である。ルカーチは，ヘーゲルが道徳問題を社会的歴史的問題として捉えているのだから，最初からカントを越えており，しかもヘーゲルの神学的著作も神学の擁護どころか，宗教批判に貫かれていると考える。とりわけ古代共和制の崩壊とキリスト教の拡大とが財産の不平等化に起因するというヘーゲルの解釈を高く評価している。

わが国の「若いヘーゲル」研究の先駆けとなった金子武蔵の『ヘーゲルの国家観』は，ルカーチに先駆けて，ヘーゲルの問題意識が社会的歴史的現実にあること，宗教と政治と歴史という三つの相即不離の主題が絡まりあっていることを明らかにしている。そして，ヘーゲルがイエスを道徳的宗教の確立者として描き，そしてこの理性宗教が実定的宗教となり国家と癒着してしまったことを批判し，民族宗教と共和政治による新たな社会を構想している点を的確に論述している。細谷貞雄の『若きヘーゲルの研究』はヘーゲル哲学の発生過程を精密に検証しており，本論文の叙述の仕方に最も近い。細谷はヘーゲルの『イエスの生涯』についての従来の解釈は的外れであり，それは国民宗教の教本の試作品なのだという独特の見解を提示している。また，理性と感性との厳しい二元論に立つカント主義では真

無限への道の先には不安と絶望があるのみであり，これを解消するものとして愛と和らぎの恩寵論が密かに垣間見えていると言う。ヘーゲルの『キリスト教の実定性』では，主観的道徳性を客観的な権威的な規制によって合法化しようとする企ては悪循環であり，挫折するほかはないことが示されていると言う。速水敬二の『ヘーゲルの修業遍歴時代』は宗教的草稿の他に，ヘーゲルの旅日記，手紙，詩等に加えて，読書歴や政治体験まで資料とする周到なものである。特に宗教的草稿はカントの思想革命やフランス革命を思想の基盤としているばかりでなく，レッシング，ヘルダー，シラー，ギボン等の思想も使い分けていることを立証し，ヘーゲルの哲学を体系として特徴づけることは時期尚早であるとしている。高橋昭二の『若きヘーゲルにおける媒介の思想』は，青年ヘーゲルにしばしば見られる「和解」という宗教的表現がいかに論理化されて「媒介」という哲学的表現に展開するのかを綿密に検討したものである。「和解」という概念は学生時代のものであり，「媒介」という概念は後のフランクフルト期に現われたものであるから，丁度ベルン期が転換期に当たることになる。この頃のヘーゲルはカントの道徳主義，二元論に立脚しつつも，人間の理性に宿る「神的火花」へ信頼を寄せ，一元論的世界観を求めていた。ヘーゲルは徳の人イエスを説こうとして，図らずも愛の人イエスを描かざるをえなくなる。高橋は「自由な自己意識的存在者」という概念にこの期のヘーゲルの特徴を見ており，これを後の自己否定による有限と無限の媒介という弁証法思想の源泉と解釈している。最新の，藤田正勝『若きヘーゲル』は，シェリングがカント哲学の前提を更に掘り起こそうとするのに対し，ヘーゲルはカント哲学の成果を道徳，宗教に適用しようとして，カント以上に道徳性，理性の優位を徹底させているところに，盟約を結んだはずのシェリングとの行き違いがあったと主張している。しかも失われた道徳性の回復のために，その政治的社会的基盤を問うところにシェリングにはないヘーゲルの独自性を見ている。

本論文は以上のような諸家の優れた研究を評価しつつも，それ等は若いヘーゲルの躍動する内面の姿を描き切っていないと見て，以下のように独特の綿密な分析を進めていく。

第二部　若いヘーゲル「哲学思想」の形成過程――『往復書簡』,『アルプス紀行』,『エレウシス』,『体系計画』――

宗教的草稿と呼ばれるもの以外の文献によって，ヘーゲル哲学の原型が探られる。

『往復書簡』の項では，シェリングやヘルダーリンとの間に交わされた九通を抄訳し，諸家の解釈も参照しつつ青年ヘーゲルの生き生きとした姿を活写している。例えば，「神の国」という合言葉はホフマイスターの解釈によれば，あるべき「目に見えない教会」という神学的意味ばかりではなく，フランス革命への絶大な共感と期待を含んだ政治的意味を有している。また「ぼくは，文芸活動の舞台から遠ざかっている」というヘーゲルの言葉等から，ベルン時代のヘーゲルの哀れなイメージができあがってしまったが，シュトラームが実証しているところでは，本当は実り豊かな時を過ごしていたのである。本論文はその「舞台」とはフランス革命の賛同者達の現実に活動している特定の集団のことを指していると解釈している。またヘーゲルもシェリングもカントに賛同しているのだが，シェリングがカント哲学の前提の欠如に不満を抱いているのに対し，ヘーゲルがカント哲学の成果の適用によって生じる効果を疑がっていないという差異があるということ，それにもかかわらず両者は友情の絆によって互いに焦燥と孤独に耐えており，既存の宗教的政治的勢力と闘う姿勢を取り続けている限りで，まだ彼らの分裂は表面化していないということが主張されている。

『アルプス紀行』を抄訳，再構成することによって，本論文はヘーゲルの特異な自然観を見出している。ヘーゲルはアイガーやユングフラウという静止した不毛の自然には少しも感動を示さず，これに対し，躍動感に溢れた水煙が激しく流れ落ち，消失する小川の光景や緑滴る生きた自然には強い感銘を受けている。本論文はここに弁証法的思考の未完成な原型を見，またカントの産出的構想力とシラーの「戯れの衝動」の影響を読み取っている。更に，山の民の厳しい生活と狡猾な性格を書き留めるヘーゲルの観察眼の確かさは，ニーチェの皮肉ぽい人間論を先取りしていると評価している。

ヘルダーリンに捧げられた詩，エレウシスの秘儀を歌いあげる『エレウシス』については，ファウストが復活祭の散歩から帰ってきた時の情趣に比するフィッシャー説，ヘルダーリンの『青春の神』への応答として，理性，自由，目に見えない教会という盟約と友情を証していると言うグロックナー説，愛する地でのルソーの自然体験と体制側から受けた彼の政治的な抑圧体験とを，ルソー支持者であるヘーゲルが追体験し，自らの姿と二重写ししつつ詠んだものではないかというボンデリ説が紹介されている。

ローゼンツヴァイクが『ドイツ観念論の最古の体系計画』と名づけた草稿の著者問題については，美の精神的観照

を哲学の核心に置く点で，執筆者をヘルダーリンとするホフマイスターの見解，美的な哲学論を重視しつつもシラーの影響を重く見て，執筆者をシェリングとするグロックナーの説，国家に関わることを実定的な権威として拒否する姿勢においてヘーゲルよりも進んでいたシェリングを起草者とするルカーチの見方，さらに，カントの要請論からの出発と自然神学の拒否，古代共和国の理想と現実の国家についての国家機械説，自然と自由を架橋する美の理念がヘーゲルの精神の核心にもあること，新しい宗教の構想等を材料にして，発展史的に見て執筆者をヘーゲルとするペゲラーの解釈が紹介される。そして本論文は，ヘーゲル，ヘルダーリン，シェリングの三者が相互に影響関係にあり，『体系』は三者に共有されていた思想であること，国家機械説は当時の知識人一般の常識であったこと等から，執筆者を特定の一人に限定するのは無理であるという見解を取っている。

第三部　若いヘーゲルのイエス像

三つの宗教的草稿群を詳細に検討し，ヘーゲルが明確な意図をもって「新しい宗教」を構想，展開していたことを推察している。

先ず，ベルン時代に先立つ学生時代の草稿『民族宗教とキリスト教』断片一が取り上げられ，ヘーゲルの基本的な問題意識が探り出される。そこでは既成の実定的権威的宗教に対し，ヘーゲルは生き生きとした主体的宗教の復権を企図しており，そのために，神と人との感情的一体感を感じる「美しい宗教心」，多様な感性的契機に統一的生気を吹き込む理性の視点，民族精神の陶冶に関与する民族宗教の形成という三つの原理が挙げられる。更に，「愛」の概念が「愛と理性の類比」という文言で提示されていることに本論文は注目する，即ち，愛と理性との脱自的働きに弁証法的運動の原型があると解釈している。ベルン時代の断片二では，ソクラテスとイエスという二人の美しき魂をもつ有徳の人物が比較される。ヘーゲルによれば，ソクラテスと弟子との関係は，共に道徳的世界を構築せんとする理性的で平等な関係にあり，ソクラテスの言葉は弟子にとってそのための機縁であるに過ぎず，ソクラテスが偶像化されることはなかったが，イエスと使徒との関係は，使徒等がイエスの教育を享受し，できる限りイエスに似ることを最高の目的とみなすところから，彼等の道徳的世界への道はイエスという「回り道」を通らざるをえないものとなり，その宗教はイエス自身の教説と行為にのみ殉ずる私的宗教となった。断片三では，イエスを囲む小集団の内部では通用する掟も，多数の者が暮らす社会の規範とは衝突せざるをえず，またその掟が第三者に押しつけられるのであれば，心という聖域に無遠慮に侵入する公的権力の越権に変じることになるとされている。断片四では，回り道をとらず，ソクラテス的に直接的に主体的，道徳的，理性的な民族宗教の形成を目指すべきことが語られている。

『イエスの生涯』では奇跡や予言等の超理性的なものを一切排除して，道徳的宗教の立場から精神革命を説く，カントの実践理性を体現した者としてイエス像が描かれている。ヘーゲルは，人間に要求されるものが形式的な行為ではなく，内なる普遍的理性の声に従うことであるとイエスに語らせ，この方針で福音書を逐次書き改めていく。しかしながらヘーゲルは，イエスのマリアとの友情や死を覚悟した言葉，行為の中に，理性では律しきれないものを見出しており，イエスを単に理性の人として描ける限界に達している。理性は，徳がすでに愛であることを知っているような，包容力のあるもの，とヘーゲルは考えているわけであり，『イエスの生涯』がカントの道徳的理性宗教を越えてすでに「ヘーゲルによる福音書」になっていることが示される。

『キリスト教の実定性』では，イエスの主体的道徳的宗教が実定的宗教に変貌する原因が探られる。既成の権威的宗教が支配しているエートスの中では，これに対抗するのにイエスは奇跡，特別な人格等という自らの神的権威に訴えざるをえず，従って彼の教団も内的基準を見失い，実定的宗派となってしまう。更に，この変質には，小集団が膨張していくにつれ内部の一体感を喪失すること，私有財産を承認せざるをえなくなること等の社会的歴史的背景があることを鋭く見据えている点にヘーゲルの独自性があると主張されている。

第四部　若いヘーゲルとキリスト教

イエスの宗教が実定的権威的宗教に変貌する歴史的推移を批判的に考察するヘーゲルの姿が描かれる。ここにおいてはヘーゲルの独自性は，誠実な人間の寛容の心や個人の自由な信仰，自由な教育を実定性から守るというレヴェルから，国家組織内における実定性の問題にまで踏み込んでいるところにある。

『キリスト教の実定性』においてヘーゲルは，レッシング，シラー，ルソーを先達と仰ぎつつ，教会が教育権を手に入れ，さらに三権をめぐって世俗国家と争い勝利を得ることによって絶対的権威を確立していく過程を論じている。先ず初期の小集団においては，各人は自由意志に基づいて社会契約を交わしてそれに参加し，人間平等の道徳的精神

の絆で結ばれていたが，歴史的経過と共に，一切の権利を集団に譲渡して自立性を喪失していき，互いに疎遠になっていく。逆に教会は市民契約にも勝さる権威となり，階級組織の面でも教育の面でも支配機構となる。更に，教会は国家との抗争の中で次第に市民の権利までも手中に納め，また教会同士の抗争は意見の違いばかりでなく，経済上の権利の争奪戦でもあったことから，抜き差しならないものとなる。市民的自由や権利を守るべき国家が支配的となった教会と癒着することから，教会信仰を放棄した者は市民的自由や自己形成権までも失ってしまうことになる。このような事態に陥ったのには悲惨な時代精神がその背景にある。そもそも，国家と宗教と個人の自由が一体のものであったギリシア社会の調和が崩れたのは，富と権力をもった貴族階級の成立にあり，それと共に，全体から疎外された市民の関心事は個人的経済的なことだけになり，支配され受動的な態度に慣らされた市民は主体的真理，主体的宗教を失い，幸福を天国に求め，神を客体的なものとしてしまった。ヘーゲルは，信仰とはあくまで個人の自由意志に基づいた自由な選択であるべきものだと考え，権威に基づく命令を伝達する支配機構としての教会に異議を申し立てる（この点で本論文はシラーの強い影響を見ている）。そして，生き生きとした精神から生み出される道徳性ではなく，外面的に義務として強制される既成の道徳を技術的に習得することだけが許されるという事態にヘーゲルは抗議し，譲渡不可能な人間の権利を守らんとする。人間を無力化，機械化する実定的信仰に対して，国民と宗教に活力を与える，民族特有の生きた想像力，今は根絶しにされてしまった宗教的想像力を再生することを求めるのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は，三年間のベルン時代のヘーゲルの仕事を精緻に検討したユニークな研究である。「若いヘーゲル」研究に先鞭をつけたディルタイが，ベルン時代の哀れなヘーゲルというイメージを定着させて以来，ヘーゲル研究にとってこの時代は影の部分となってしまったが，本論文は敢えてこの部分にスポットライトを当てるという意欲的な試みを行なった。そもそもヘーゲル哲学は宗教学や論理学は言うに及ばず，美学，法学，政治学，果ては物理学，化学までも包み込んだ極めて緊密な体系をなしているものであり，汲み尽くせないほどの広さと深さを備えているが，それだけに反面，難解さや毀誉褒貶の激しい点でも哲学史上稀に見るほどのものである。そこで本論文は，大学卒業後漸く活動を始めたばかりのヘーゲルの姿，ヘーゲル哲学の誕生の場面を「内面的主体的方法」をもって再現することによって，ヘーゲルの固有の問題意識やものの考え方を探り，ヘーゲル哲学の真相に迫る手掛かりを得ようとしたわけである。しかも，当時の書簡や詩は言うまでもなく，取り上げられることの少ない紀行文まで材料とし，しかもほとんど逐語的と言ってもよいほどの詳細な文献解読を基礎にした，着実で信頼のおける研究になっており，今後の「若いヘーゲル」研究にとって必須の文献に加えられるであろう。

本論文の具体的な成果は，従来の内外の「若いヘーゲル」研究を総覧，分類して今後の研究のための見通しをよくしたこと，ヘーゲルが親友シェリング，ヘルダーリンとの従来から知られていた交遊関係，影響関係，差異を再確認し，更に，ルソー，カント，フィヒテ，レッシング，シラー等の影響を逐一再確認したり，新たに発見したりしたこと，ヘーゲルがカントの道徳的理性宗教論を徹底しつつ，図らずもその限界に逢着せざるをえなかった経過を詳述し，先人の研究成果を裏付けたこと，そして，主体的宗教が客体的実定的宗教に変貌する過程を，集団そのものが内在的にもたざるを得ない性格，個人と集団，集団と集団との社会的歴史的側面から解明せんとするのがヘーゲルの独自性であること，主体性と客体性との総合が彼の目指すところであること等を明らかにした点である。

個々の議論については，ヘーゲルがシェリング宛の手紙で「文芸活動の舞台から遠ざかっている」と嘆いているのは，文化とは縁遠い地にいるという境遇を一般的に嘆いているのではなく，フランス革命の賛同者達の特定のグループから離れていることを残念がっているに過ぎないという推定，『アルプス紀行』を再構成して，生動的な自然のみを評価するヘーゲルの特異な自然観を明らかにし，自然の躍動を「自由な戯れ」として愛しむヘーゲルの姿にシラーの影響を見て取っていること，またシラーの影響は生涯にわたっていて，例えばシラーの「この世界歴史こそ世界審判なり」という着想がヘーゲル哲学の体系形成の原動力になっているという指摘，あるいは，「神と世界との和解者としてのキリスト」という表現や，集団そのものがもつ内在的矛盾を見抜く眼差しに弁証法の萌芽を見る解釈等は非常に興味深い。

しかし，本論文にも問題がないわけではない。ベルン期の思想の，その後のヘーゲル哲学の生成と発展の中における位置づけが述べられていれば本論文はいっそう価値の高いものになったであろう。例えば，弁証法と言っても，単に力動的多面的思考というだけにとどまらず，カント批判に転じつつ，媒介概念を導入し，三肢的円環構造として整えていったのはフランクフルト期であったことを考え合わせば，少なくともベルン期に続くフランクフルト時代における展開との関係は論じてもらいたかったところである。また，興味深い解釈が「注」において主張されていることが多いが，こうした記述の仕方は控え目過ぎるように思われる。しかしながらこのような問題が残るにしても，それは本論文の価値をいささかも損なうものではない。

本審査委員会は本論文を博士（文学）の学位を授与するに十分なものと認定する。